連載　安居總子（やすいふさこ）の国語教室⑬

毎日の授業や生徒との接し方に悩む若い先生たち、こんな小さなきっかけから生徒が変わります。

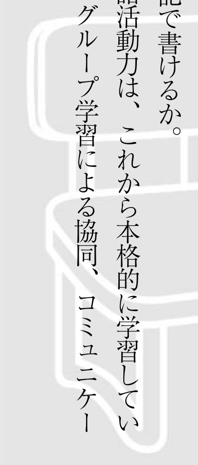
二学期の本格始動に向けて

1 「授業開き」での診断的評価

前号では、四月入学時に行う「授業開き」の単元について書きました。「授業開き」には、小学校で育てられた学力の診断を行い、学力が身についているかを確かめ、学んだはずなのに身についていない言語活動力を再度訓練して、確かな力としていくねらいがあります。いわゆる基礎的・基本的な力がついているか否かを、学習者と指導者が確認し合って、中学校の学習（授業）をスタートさせるためのものです。小学校で身につけた学力は、教室での学習（授業）をことなく進めるための、ごく常識的・基本的な言語行動力です。

「授業開き」（約二十時間）で習慣化される言語活動力は、次に掲げる①～⑱のものです。これは、社会に出ても通用する言語生活の常識といってもよいでしょう。四月から五月にかけて学習者を見てチェックしたものを、九月からの学習に備えて、学習者個々について、また、学習者の学級集団との関係において、夏休み中にもう一度チェックしましょう。

①だまって聞いているか、聞けているか。
②話し手のほうを向いて（目を見て）聞いているか。
③話は最後まで聞いているか（途中でしゃべり出したり、聞かなくなったりしていないか）。
④一回で聞き取れているか（指導者の指示などを一回で受け止めているか。――「今なんて言ったの。」と聞き返したり、友達に聞いたりしていないか）。
⑤一字一句間違いなく聴写できるか、視写できるか。
⑥話を聞いて（聞きながら）メモできるか。
⑦メモから言葉（文・文章）にすることができるか。
⑧話の要点、大意・要旨、感想・意見、疑問や問題点などを、メモしたり文章にしたりすることができるか。
⑨返事ができるか。
⑩声を聞き手に届けることができるか（発声・発音・声の大きさ・話す速さなど）。
⑪パブリックな話し方――「敬体」で話すことができるか（「私（わたくし）は……」「……です。」「……ます。」）。
⑫伝えたいことを明確にして、一まとまりの話にし、事柄ごとに区切って（短文にして）話すことができるか（一文でだらだら言わない）。
⑬問いを出せるか。問いに対して正しく答えられるか。
⑭文章を一回で読めるか（読む習慣があるか）。
⑮自分の国語辞典を持っているか。また、国語辞典で調べる習慣があるか。
⑯文字を正しい字体で、速く書くことができるか。筆力は十分か（学習者の書いたものを、そのままコピーして学習材にすることがあるため）。
⑰一〇〇～二〇〇字程度の文章はすぐに書けるか。
⑱正しい表記で書けるか。



これらの言語活動力は、これから本格的に学習していくのに必要な、グループ学習による協同、コミュニケーションによる共有の理解のために、必要最低限の学力であり、「総合的な学習の時間」においても、これだけは身についていないと困ると思われるものです。身につくまでには、怠けないで小さな努力をすることが必要、ということを体験させねばなりません。放置すると「やらない人間」になります。「やれない」と「やらない」は違うのです。

2 「話し合い」を中核にすえて

「学び」には、二つあります。

A　……がわかる
B　……ができるようになる

Aは「内容知＝価値」、Bは「方法知＝技能」です。方法知を身につけるためには、「やる」しかありません。国語科では、「聞く、読む、見る、話す、書く」です。さらに、「他者と話し合う（コミュニケーション）」が加わります。

学びは、基本的には学習者個々のものですが、個が豊かになるためには、どうしても他者と話し合うことが必要です。「他者と話し合う」ことは、集団の学習では不可欠です。学習者の思考のパターンはいくつかに分類することができます（例えば、分析型・行動型・感覚型・友好型あるいは対事型・対自型・対他型・対辞型）が、話し合いを体験することによってしか他者を知ることはできません。他者を知ることが、個の思想を広げ深めることに役立つのです。

「話し合い」は、ペアにしてもグループ（四人が理想的）にしても、異なる者同士の組み合わせがよいようです。私たち教師は、座席によって安易にペアやグループを作り、話し合いをさせがちですが、同じ考えの者同士より、異なる者同士の組み合わせのほうが学びを豊かにさせることを知っています。しかし私たちは、常に理想的な組み合わせを作るための時間はほとんどなく、準備もできません。だとしたら、ペアやグループでの話し合いを、（同じことを学んでいるクラス）全員のものとして発表させて、互いに共有できるようにしてはどうでしょう。一時間の授業の中の最後の十分は、途中までの話し合いの経過報告でもよいから、発表させるのです。そうすると、学習者一人一人は、自分の思考の内容や向き、程度と比べて、自分の学びの方向を確かにすることができます。

平等に経験させるために、役割を分担させましょう。役は順番に変わっていき、四人のグループなら四回で一巡りします。次の話し合いでは、グループの構成メンバーを変えます。そうすることによって、より多くの他者との接触を得ることができます。

話し合いの成立には、Aの学びの「価値目標」――内容知が問題になります。求めるものが何か、学びの目的が何かがはっきりしていれば、学びは成立します。あとは、費やすことのできる時間で授業の進め方（ストーリー）を作って、学習者に示します。そこに、「話し合い」が核になっていれば、学習者は動き出します。それにしても、内容知に何を求めるかが問題です。

（元岐阜大学教授）